

## 〈二月革命〉の基層：カトリシズムの視点から

清水 展  
(九州大学教養部)

---

はじめに

- 1 開発独裁型マルコス強権体制の破綻
  - 2 ベニグノ＝アキノ氏の暗殺
  - 3 制度としての教会の積極的な政治関与
  - 4 心の内なるカトリシズム
  - 5 出来事の反芻と総括
  - 6 祭りのあとで
- 

はじめに

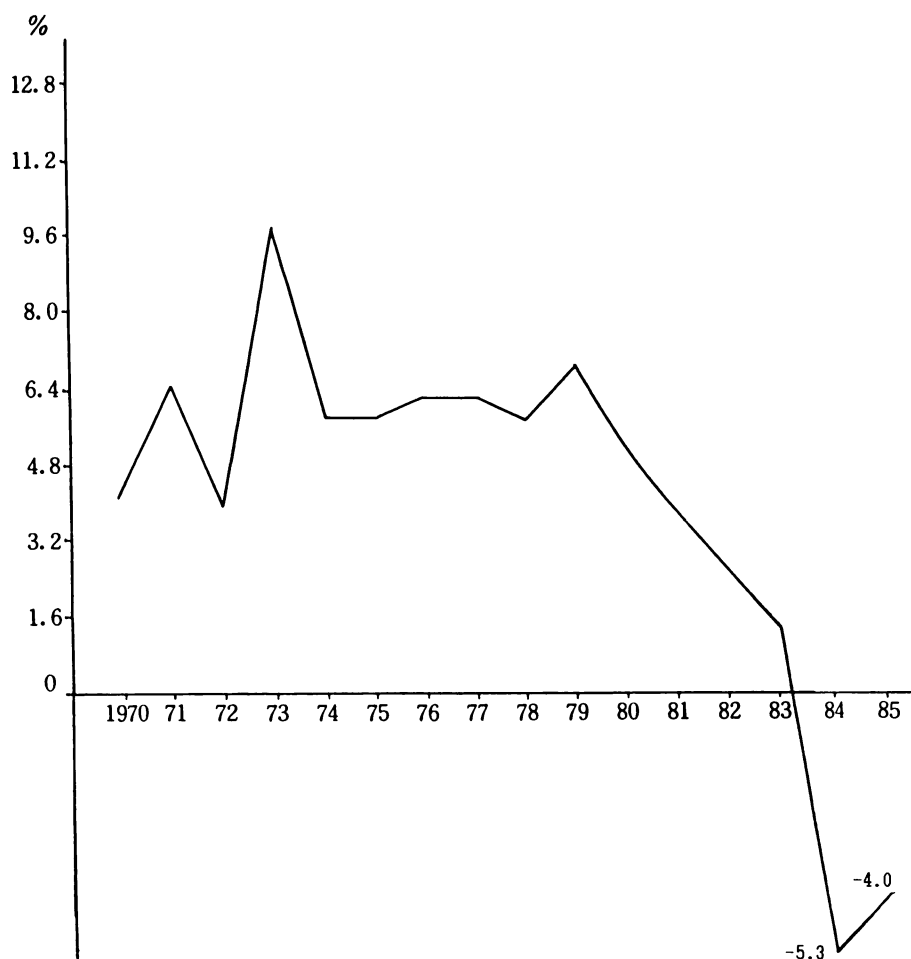
今日、フィリピンの〈二月革命〉の基層について、カトリシズムの視点からお話ししようとする大まかな概要は、お手元のプログラムにも書きましたように、1986年の〈二月革命〉の4日間の出来事をそれ自身で完結する4日間の出来事としてではなくて、ベニグノ＝アキノ元上院議員の暗殺に始まる政治、社会状況の推移と広汎な大衆運動の持続的高揚のしかるべき帰結として、あるいは一つのまとまって解釈されるべき大きな出来事として捉え、その過程における制度としての教会、とりわけ一部宗教者達の積極的な政治関与と一般民衆の心の内なるカトリシズムとが果たした役割について考察しようとするものです。

もちろん、〈二月革命〉に至る背景を考える場合に、政治的あるいは経済的なマルコス体制の破綻というものを抜きにして理解することはできません。けれども、政治・経済的なマルコス独裁体制の破綻が、そのまま〈二月革命〉を引き起こしたのではなくて、そうした破綻によってもたらされた生活苦、経済の混乱、政治的な危機に対して、カトリシズムが世界を見るためのメガネとして、あるいは状況にかかわる際の行動の指針として、一般の民衆にどういう理解の枠組を用意し提示したかということについて、お話ししてみようとするわけです。

### 1 開発独裁型マルコス強権体制の破綻

最初に、フィリピンのGNPつまり国民総生産の推移(資料1)を見ていただきたいと思えます。1970年代には、5%くらいから9.5%くらいまでの間、1973年つまり戒厳令の施行の翌年にはGNPは上がっていますが、その後、5%台をずっといくわけです。そして、1979年、80年から一気にマイナスの方向に向けて進み、83年でプラスの1.5%、83年以後は奈落の底に陥るよう低下し、84年度はGNPの成長率がマイナス5.3%、翌年はさらにマイナス4.1%となります。もちろんGNPの下降、さらにはマイナス成長へということの外在的な

[資料1] 国民総生産（GNP）の実質成長率



出所：NEDA *Development Report* 各年度版，Manila

要因としては、第二次石油ショックによる原油価格の高騰と、一次産品価格の下落があるんですけども、内在的なフィリピン経済の破綻というのは、一つには開発独裁型の指導者であったマルコスの強権体制の破綻に起因しています。開発独裁型指導者というのは、要するにアメとムチを使い分けるやり方、つまり、政策の効率的な実行のために反対勢力を押えこみ、人々の人権を抑圧し、自由を拘束するというふうな形でムチでしめるけれども、その代わりに経済を発展させ、パイを大きくして、民衆の生活を向上させるという、そうしたアメとムチの政策なのですが、それが失敗した。外在的には石油ショックの問題がありますが、内在的には輸出加工区政策にもとづいた工業化の失敗、あるいは根本的にはマルコス体制の内部で進んだ汚職や腐敗、そうしたことにより経済が停滞し破綻状態になってしまった。失業とインフレによって都市でも農村でも人々の生活は極端に困窮の度を深め、その一方で不満の

声をあげ、異議申し立てをしようとするならば、軍のテロルによって命を奪われかねない抑圧状況が一層深刻化していく。ムチだけが強くなり、アメが与えられないようなマルコス体制というものは、本当に国民を指導する正統性を持ちうるのか否かという危機状態が生まれたわけです。

## 2 ベニグノ＝アキノ氏の暗殺

そうしたことが底流にあるのですけれども、資料1の通り、1983年からGNPは一気にマイナスへと突入していく。この1983年というのはベニグノ＝アキノが8月21日に暗殺された年で、ベニグノ＝アキノの暗殺を契機として、フィリピンの金融、経済、商業の中心地であるマカティ地区では、ほぼ毎週のように反マルコス運動のデモや集会が催されるようになった。そうした反マルコス運動の展開をにらんで、マルコス体制は長くは続かないという見通しを得て外国資本家が資金を回収してフィリピン以外のところに投資する。あるいは、フィリピンの企業家自身も資金を回収して海外に避難させるということが行なわれました。そうした一つのターニング・ポイントがこの年だったのですけれども、単に経済的にマルコス体制の崩壊が始まった年であるということだけではなくて、それは同時に<二月革命>が始まった年でもあったわけです。

遡って考えてみますと、コラソン＝アキノ大統領が1986年の<二月革命>の直後の、3月2日に、ルネタ公園に数十万の人々を集めて神に感謝する勝利の大集会を開いています。その時の演説のなかで彼女は、「私は今、ニノイ（夫であるベニグノ＝アキノのこと）のことを想わずにはいられません。そして、彼の死を聖金曜日に、我々の解放をイースター・サンディにたとえてみざるを得ないのです」と述べています。<二月革命>というのはイースター・サンディ（復活の主日）であり、キリストのよみがえりと同じように、フィリピンの人々がマルコス体制という闇の支配に打ち勝ち、解放され、救済された時であるとして捉えられ、ベニグノ＝アキノの暗殺がイエスの十字架の上での死と同じであるというふうに、大統領のお墨付きのような形で語られているわけです。

それでは、ベニグノ＝アキノの暗殺はどのようなインパクトをフィリピンの民衆に与えたのか。存命中の政治家としてのベニグノ＝アキノは、要するに私利私欲と野心に満ちた、有能ではあるが本当には民衆のことを考えていない政治家だと思われていました。彼は戒厳令の発布と同時に、マルコスの最大の政敵として国家反逆罪で捕らえられて7年ほど獄中にあった後で、心臓発作をおこして、手術のためにアメリカに亡命のような形で出国することを許されます。そして3年余りのアメリカでの亡命生活を終えて、1983年の8月21日にフィリピンに帰国する。帰国する時点までのベニグノ＝アキノのイメージは、悪くいえばアメリカン・ボーイやCIAの手先というような見方もありましたし、あるいは若い世代にはすでに忘れ去られた存在になりつつありました。

しかし、ベニグノ＝アキノが暗殺された時に、マスコミを通じて—このマスコミというのは、マルコスの検閲統制下にあったマスコミではなくて、オルターナティブ・プレスと呼ばれる反マルコスの新聞等のことをいうのですが—そうしたマスコミを通じて殉教者アキノ、殉国の英雄アキノという新しいイメージが作られていく。アキノが死ぬことによって初めて、彼の見なおしや再評価、生前の言動の掘り起こしという作業がマスコミによって行なわれる。そして、それまで彼が言ってきたことを見逃したり半信半疑であったりしたけれども100%本

当だったのではないかというように全く見方が変わり、さらには彼の一連の言動とその生涯を理解し、位置づけるためにキリストの受難物語を範型として彼の殉教物語が作られてゆく。すなわち彼の生と死は、獄中におけるキリスト体験、改心、殉教の甘受、死の覚悟、予言の成就としての暗殺というひと続きの筋をもった物語として意味づけられる。アキノが殺された。そこでアキノの生前の言動を見てみると、彼はいろいろなことを言っている。もちろんアキノは、政治家としての自分のメッセージのより強い効果を考えてのことでしょうけれども、例えば、自分は帰国するけれどもそうすれば殺されるかもしれない、でも殺されてもかまわない、というふうなことを言っている。あるいはイメルダ＝マルコス大統領夫人自身やエンリレ国防相が、アキノが帰ってきたら共産党勢力が暗殺を実行しようとしているから帰って来ないようにというような警告を事前に言い、新聞等で報道されています。彼の生前のメッセージを読み直しますと、例えば、資料2（41頁参照）で紹介しているようなことを彼は言っている。「ボストンのタクシー（強盗）に殺されるよりは、栄誉ある死を死にたい。我々は、何か焦点が、人々が結集するための中心が必要で、もし私が銃で撃たれて死ぬならば、私がある結集のための中心になることができるのです」などと言っている。それまで戒厳令体制下、あるいは戒厳令が一応名目的に解除された後でも、果敢にマルコス体制に異議申し立てを行っていたのは、共産党系の左翼労働団体と学生が中心だったのですけれども、ベニグノ＝アキノはフィリピンの人々は決して臆病ではなくて、何か結集のための焦点が必要で、その核さえあれば人々は立ちあがるのだ、もしその焦点のために自分の死が必要ならば喜んで死んでも構わないということを言っていたわけです。

そして、暗殺された後のマスコミのベニグノ＝アキノ特集では、こうした彼の生前の言動のなかでも、とくに死を予感し死を覚悟したメッセージの部分が好んで取り上げられていくようになりました。例えば、彼は亡命から帰国する前に、ロサンゼルスアンバサダー・ホテルでの集会に行きましたが、そこでロバート＝ケネディが暗殺された場所に立って、「もし、私がケネディのように頭を撃たれて暗殺されても、私は絶対に膝から崩れ落ちない。常にフィリピンの人々とともに闘うために、一步でも彼らの近くに行こうとしていた意志を示すために、両手両足をのばして、前倒れになって倒れる」というようなことを言っています。実際、彼は飛行機からタラップを降りてゆく途中で後ろから兵士に後頭部をピストルで射たれ、両腕をかかえていた連行兵士によってそのままタラップの下に放り出されたのですけれども、確かに結果として人々が目にする現場の写真では、彼はタラップの下で両足をまっすぐにして、うつ伏せになって倒れていたのです。また、彼は中華航空でマニラに入る前夜の、台北のホテルでの最後のインタビューの時に同行の記者団に対して、高性能の防弾チョッキを示しながら、「もうこれで大丈夫だ、けれども頭を撃たれたら一巻の終わりだ。起こるとしたらあつという間に起こる。みんな、常に注意していてくれ、いつそれが起こるかわからない」、というようなメッセージを発しています。また、台北からマニラに飛ぶ中華航空機のなかで、彼は一緒に乗り合わせたフィリピンの女性から歓迎のキスを受け祝福されますが、そのすぐ後で皆から離れて空席のところに行ってひたすら祈る。その後飛行機が空港に着いた後に、兵士が迎えに来た時に立ち上がった彼の顔は、かなり緊張してこわばっていた。そういったことを見てマスコミは、彼が飛行機のなかで皆から離れて祈った時は、イエスのゲッセマネの祈りのように、最後の祈りをしたのであり、そうした祈りの後に殺されるのを覚悟の上で、彼は兵士に連れて行かれたというように解釈する。台北のホテルでのインタビューや飛行機

の中での彼の様子はフィリピンのテレビでは放映されなかったのですが、日本やアメリカの番組が大量にビデオに録画されて持ち込まれたのです。

要するに、ベニグノ＝アキノは、自分が殺されるということについて、殺される可能性は無きにしてもあらずだが、おそらくは殺されないだろうと読んでいたと思うのですけれども、実際には殺されてしまった。彼自身は、空港からそのまま再び軍の監獄に連行される可能性が一番大きいと考えていたようですが、自分の帰国を劇的に盛り上げるための政治宣伝として、死の覚悟というふうなことを盛んに言った後で、実際に死んでしまった。資料3（41頁）にあるように、ベニグノ＝アキノは、マルコスの次の大統領は絶対にアキノだと言われるような輝ける経歴の政治家であったのですけれども、戒厳令で逮捕され、独房に押し込まれてパンツ一枚にされて、眼鏡を取り上げられ頭痛に悩まされながら、何でもかき辛い思いをしなければならぬのかというふうな、孤独と絶望のなかで苦しんだわけです。そのなかである時キリスト体験を持ち、白昼夢のなかでキリストを見ることによって自分の苦しみは神の試練であり、神の意志に従って生きようとする変身と再生の経験をし、そのことを友人の上院議員あての手紙に書きます。アキノが死んだ後は、こうした私信も大きな注目を浴びて、活字になって流布しました。キリストとの直接体験、交流によってアキノは生まれ変わった。祖国のために身命を賭して生きようとする政治家へと獄中で変身していたのだと理解されたのでした。コラソン＝アキノ大統領自身も、ベニグノは獄中で生まれ変わったのであり、それまではスマートで野心に富んだ政治家であったのが、政治家というのは人々に対する愛の一つの行為を担うにすぎないのだという考えを持つ人物に変わっていった、というようにインタビューで答えています。

そうしたことをふまえて、彼の暗殺後に、ベニグノ＝アキノはすでに生れ変わっていたのであり、フィリピンの民衆の解放のために殉教を覚悟し、死を甘受する決意をし、そして実際に彼は死んだのだ、という物語が作られたのでした。こうした物語が廻行的に作られた後に、それまでの「飼い慣らされた羊のよう」と言われ、マルコスの強権、抑圧体制に沈黙していた人々、とりわけ中産階級の人達がマルコスに対する異議申し立てのために立ち上がっていく。ベニグノ＝アキノの死によって、状況が一気に全面的に変わっていったわけです。すなわち、実体としてのナショナリズムの確かな根拠が示される。ナショナリズムというのは、一つには教育によって徐々に作られていくものでもあるのですが、この場合には一人の人物、しかも極めて社会的な地位の高い人物が殺されることによって、彼があがなおうとしたもの、彼がその輝ける生を捧げ、死をかけて体現しようとしたもの、すなわち「祖国フィリピン」が実体として、あるいは目に見えるような形で示された、ということです。献身と自己犠牲の対象としての「祖国」が見い出され、何ものにもかえがたく価値あるもののために、直接的に政治に関与しなければならない、そうしたインスピレーションを与えられるナショナリズムが、彼の死によって喚起されたのでした。

ベニグノ＝アキノの生前のさまざまなメッセージのなかから、「フィリピン人は死に値する」(The Filipino is worth dying for) という言葉が選出されて、それ以後のあらゆる集会やデモの時の代表的なスローガンとしてプラカードや横断幕に書かれて、人々の目にふれるようになりました。それに対しては、「ニノイ、あなたは一人ではない」(Ninoy, hindi ka nag-iisa) という言葉が示された。それは、マルコスの犠牲になったのはあなた一人ではないということとともに、死の危険の中でなおかつ異議申し立てをしようとしたのは、あなただけではない、

私もあなたに従って立ち上がるんだ、という二重の意味を持つメッセージであります。あるいは「わが祖国、人民よ、目覚めよ」(Bayan ko, gumising ka) というメッセージが作られて繰り返し示されていくという状況が生まれた。ベニグノ＝アキノの暗殺が<二月革命>に至るまでの一<二月革命>をダイナマイトの爆発とすれば一最初の導火線の発火点だったわけですが、その直後にはベニグノ＝アキノ暗殺の真相究明委員会、アグラバ委員会が組織されて、翌84年の7月まで計100回を越える公聴会が開かれ、さらにはその調査結果にもとづいて、今度は軍事法廷でベール参謀長以下の26人の軍人が起訴されました。その模様、週に何回も開かれる委員会あるいは軍事法廷の様子がマスコミをにぎわせて、人々の政治的な関心と怒りを持続させていくという状況が見られたわけです。軍事法廷が最後に、起訴されたベール参謀長以下全員の無罪という形で結審するのが1985年の12月2日のことでした。そして12月7日からは繰上げ大統領選挙の選挙戦が始まった。このようにベニグノ＝アキノの暗殺事件の審理が繰上げ大統領選挙の直前まで続いたということにより、彼の死の衝撃が<二月革命>に至るまでの状況の基層を一貫して規定する通奏低音となったのです。

### 3 制度としての教会の積極的な政治関与

それならば、そうしたベニグノ＝アキノの死のインパクトを受けて、政治的に覚醒した人々、とくにフィリピンの中産階級を絶えず叱咤激励し、<二月革命>に至るまで導いていったものは何であったのか。一つには制度としての教会、とくに上層部のシン枢機卿らの積極的な政治的発言です。例えば資料4(42頁)の「暗殺一周年ミサにおけるシン枢機卿の説教」を参照してください。そこには次のようなメッセージが見られます。「行進は催涙弾と警棒によっていかに阻止されようとも、その目的地に達しなければなりません、集会は、約束の地を手に入れることがなければ、いかに感動的な演説があろうとも無意味です」というようなことが話されています。状況と係われというふうに叱咤激励していくわけです。また、シン枢機卿は、大統領選挙の直前に談話を発表して、マルコス派の買収のお金は、その日の子供のパンを買ってやれないような貧しい人々が受け取っても構わない、けれども、それによって、我々は良心までも買われることはないのだ、と言うわけです。お金を受け取った後で投票する時には、子供たちの将来のために、あるいはフィリピンのよりよい未来のために、どちらの候補者がよりふさわしいか、頭を使って判断しなさいというのです。暗にアキノの支持を表明していったわけです。

選挙が1986年2月7日に行なわれた後、レーガン大統領が選挙の不正は双方にあった、という談話を出しました。それにもかかわらず、フィリピンに民主主義が存在することが証明されたことは望ましいことだ。フィリピンの軍事基地の存在は、アメリカにとっていちばん重要であるということやレーガンは言ったわけです。そのためフィリピンの多くの人達は、アメリカがマルコスを全面的に支援している、というように捉える。フィリピンの人々は、アメリカはマルコスに圧力をかけて大統領選挙の繰上げ実施を行なわせ、さらには選挙の監視団体まで派遣して、公正な選挙が行なわれるようにして、アキノへの橋渡しをしてくれたものと過大な期待をかけていた。ところが、アメリカは米軍基地の方が重要だからということで、マルコスへの暗黙の支援をレーガンの談話という形で出してしまった。これはレーガンの個人的な発言で、国務省などがつめた見解ではなかったのですけれども、これによってフィリピンの人々は失望し、怒り、同時にがっかりして力をなくす、といったことになり

ました。そうした時にフィリピンのカトリック司教団の声明が発表されて、アキノ派を勇気づけたわけです。司教団の発表は、資料6（42頁）にありますけれども、その要点は「道徳的原理によれば、不正な手段によって権力を獲得、または維持する政府は道徳的な基盤を有しない」という点にあったわけです。つまり、マルコス大統領は不正選挙のあらゆる手段を使って権力を獲得したので、彼はフィリピンの大統領たる資格はない、とする見解です。資格はないと断定した上で、「今は発言すべき時である」、「今は悪を修正すべき時である」と述べ、さらには「悪は計画的に組織されている」ゆえにその是正、つまりマルコス排除の行動も団結して組織的に行なわなければならないという呼びかけを司教団が発表したわけです。

ベニグノ＝アキノの暗殺の際に、その第一報を流して暗殺の衝撃を伝えたのはカトリック教会が運営しているラジオ・ベリタス局でした。フィリピンの人々が最初に立ち上がってベニグノ＝アキノの死を悼んだ時、とくに彼の埋葬の日の葬送のデモは、教会から埋葬地までマニラの主要な目抜き通りをぐるっと回るようにして、まる一日かけて行進し、沿道の人々も含めて百万ぐらいの人が出ていたんですけれども、それはアキノに対する死の悼みの表現であるとともに、マルコスに対する異議申し立てでもありました。それを実況中継して、沿道の人々が葬送の列の到着を待つあいだ、今、葬列はどこにあり、どういう状況で人々に迎えられているかということ放送し続けたのがラジオ・ベリタスです。また、＜二月革命＞の決起の際に、エンリレとラモスの記者会見の様態を中継し、それ以後ずっと決起軍の側にたってエンリレとラモスのメッセージや指示、それらを聴いてかけつけた人々のメッセージを伝えたのもラジオ・ベリタスでした。エンリレとラモスとが1986年の2月22日に決起して＜二月革命＞の呼び水となったその夜には、人々は最初は半信半疑だったわけです。マルコスはすごい策謀を弄する人間であり、また、エンリレは百パーセントは信用できない人間。エンリレとラモスが記者会見した時には本当だろうかと最初は半信半疑で、その後では、もし本当だとしたら、内乱が起こるのではないか。内乱が起こったら怖いなというような、そうした人々の最初の反応の後に、シン枢機卿がエンリレ、ラモスの二人を、我々の二人の友と呼び、二人に対する連帯を示すために反乱軍のたてもこる基地に行き彼らを守るようにというふうな指示をラジオ・ベリタスを通じて与えた。それによって二人の決起の正当性が保証され、人々が家を出て基地に向い、ヒューマン・バリケードを作った次第です。

制度としての教会は、ベニグノ＝アキノの暗殺から＜二月革命＞にかけて、一貫して状況と積極的に係わりようとしてきた。ただ、制度としての教会というのは、とくに指導上層部というのは、最初からそうではなくて、戒厳令がしかれた当時は暗黙裡の支援をマルコス体制に与えていたわけです。それが、マルコス離れをするようになったのは、経済的な危機の深刻化、それにともなって増大する共産党・新人民軍の勢力、あるいは強権的抑圧体制を強化することによって乗り切ろうとするマルコス体制を支える軍や警察によって引き起こされる人権侵害の深刻さ、そうしたものによって体制に対する危機意識を強めマルコス離れを進めていくのです。けれども、教会の上層部が状況に積極的に関与して、マルコス批判を強めていく最大の理由は、マルコス体制が続く限り、共産主義の浸透と勢力拡張が一層進み、教会存立の基盤を失いかねないという、共産主義に対抗するための政治的な判断が大きかったわけです。それに対して、ヒューマン・バリケードの先頭に立ったようなシスター（修道女）やセミナリアン（神学生）達、いわゆる教会の組織からいけば下層、あるいはその周縁にあった人々は、例えば生活改善のためにスラムに住み込んで奉仕活動をし、人々と生活を共にし

ながら生きる中で、民衆の生活の困窮、抑圧の深刻化をまのあたりにして、これではいけないという形でマルコス体制批判、マルコス離れを強めていった。同時にこうした人々が、教会上層部に対する圧力となって教会の上層部のマルコス離れ、批判を加速化させていくのです。いずれにしても教会の上層指導部よりも周辺部にある人々が中心になって、民衆への共感からマルコスへの異議申し立てをしたのです。さらに過激な人達のなかには、現体制そのものに失望して共産主義勢力に同調していくような人々も出てきます。教会の組織は大きいものですし、右寄り、中道、左寄りというのがあるわけですが、状況への係わり方が上層部と周辺部では根本的に違っていた。けれども、マルコス離れ、マルコス批判ということでは一致して状況を<二月革命>へと押し進めていったと言うことができます。

#### 4 心の内なるカトリシズム

さて、心の内なるカトリシズムということで、私が言いたいのは、制度としての教会の積極的な政治関与、あるいは指示を受けとめる人々の心のなかでのカトリシズムの働きというもの的重要性であった、ということです。アキノ大統領は彼女自身とても敬虔なクリスチャンですが、それだからということもあって、彼女の政治的なメッセージはきわめて宗教的な色合いの濃い演説になっています。例えば、マルコスの支配を「この世界を今覆っている闇」というように表現し、「はびこる悪」と捉えたり、あるいは状況が厳しい時にこれは神の試練だと捉えたり、犠牲を甘受しようとか、祈ろうというふうな呼びかけをする。これはアキノ大統領自身の宗教的な敬虔さとともに、政治的なメッセージを民衆の心の一番深い奥にまで伝えるためには、カトリシズムの粹組のなかでメッセージを発するのが最も力強い訴えとなるということをおそらく彼女自身、無意識のうちに理解していたということでしょう。危機的な状況にあっては、日本でも苦しい時の神のみという言い方がありますが、宗教の言葉にメッセージを乗せることが最も真摯に意志が伝わるということを、無意識のうちに感じとっていたのではないかと思います。

宗教的なキー・タームを政治的なメッセージに乗せるというのは、ナムフレル（National Citizens Movement for Free Election）、つまり中央選管に対して市民運動家たちが公正な選挙のためのボランティア監視組織をつくったわけですが、その全国で50万人を動員したナムフレルの委員長であるコンセプション氏が、投票日の前日に全国のボランティアにあてたメッセージというのが、やはり同じようなキー・タームで語られています。全国の活動家に対して、氏は「誰もが耐えなければならない。侮辱や罵声、さらには犠牲さえも強いられるかもしれない。それでも民主主義の実現のために頑張ろう。神に祈ろう、我々が耐えられるように。」と言っているわけです。そういった神の試練、犠牲の甘受、祈りというような言葉で状況を規定し、状況に係わる自分たちの態度を示しているのです。あるいは一番最初に紹介したように、<二月革命>を、それ自体で完結する出来事ではなくて、ベニグノ＝アキノの暗殺に始まり、<二月革命>で終わるような大きな一つの物語であるとして、それはキリストの十字架の上での死と復活に等しいのだという喩えが人々の心を打ち、最も理解可能な物語として<二月革命>を捉えさせる、そうした比喩が可能となるのは、人々の心の内なるカトリシズムが大きな役割を担っているからではないか、というふうに思うわけです。

また、心の内なるカトリシズムと関連して、教会上層の指導部やアキノ大統領自身が政治というものを人々にイデオロギーの問題としてではなく、むしろモラルの問題として表現す



る。カトリック司教団の声明にもありますけれども、政治的な危機を悪の支配の蔓延、あるいは不正がはびこっている、邪悪が世を覆っているような状態として捉え、そうした不正と邪悪を正す、あるいは悪の根元を追放、放逐し、社会正義を実現しなければならないという形で、人々の政治的な参加、関与を説くわけです。もし、イデオロギーとして説いていたならば、広範な民衆参加がかなり限定されたものになっていたかも知れません。しかし、政治をイデオロギーではなく、善悪のモラルの問題の方へと次元をずらすことによって、反マルコス勢力を結集することが可能になったという、そうした意味での民衆の側の政治メッセージの受容装置としての心の内なるカトリシズムの働きも重要であったであろう、と考える次第です。

## 5 出来事の反芻と総括

〈二月革命〉の後には、この〈二月革命〉の解釈一どのように〈二月革命〉が生じ、望みうる最大限の結果を得ることができたのかということについて説明するための、出来事の総体を一つの物語として捉えるような解釈一の構築があったわけです。今まで述べてきましたように、カトリック教会のシン枢機卿などを中心とした制度としての教会が積極的に示した解釈は、〈二月革命〉がほとんど無血の平和裡の〈革命〉でありえたのは、神のなされた業であったからであるというものです。あんなに強大で、軍を自分の私利私欲に奉仕するような機関、暴力装置にかえ、絶対につぶれないと思ったマルコスが、ほとんど非暴力的に国を出ていったということ、血が流れなかったというのは一つの奇跡であり、なぜそうした奇跡が起こったかということ、それは神が介在してくれたからだということです。神が〈二月革命〉の4日間、我々とともに戦ってくれたからだ、とアキノ大統領自身が言っているのですけれども、どうして神が戦ってくれたかということ、それは人々が一生懸命に祈ったからだ、ということです。祈りの力による神の恩寵の顕現が無血の〈革命〉となり、奇跡の実現となって示されたというふうな物語が作られたのです。また、こうした物語はシン枢機卿が積極的に流布するとともに、例えば決起に参加した国軍改革派の指導者達やヒューマン・バリエードの参加者達もマスコミとのインタビューに応じて、やはり神の加護があったから、これは常套句かもしれませんが、神の加護があったから勝つことができたと語っているわけです。

祈りの力と神の恩寵による奇跡ということについては、1985年のマリア年の祝いをフィリピンが持った、ということが重要な伏線となっています。マリア年の行事とその際の祈りが1986年の奇跡を準備したというような解釈も出されるのです。これはマニラ在住のフィリピン研究者の寺見元恵さんという方が朝日新聞の夕刊（1986年3月17日付）に書かれているのですが、1985年は聖母マリア生誕二千年の年としてフィリピン各地で1年間いろいろな宗教的行事が行なわれた。そこで神父たちは人々に、「経済的な貧困、増える一方の暴力、そんななかで我々は一体何をすればいいのだろうか、聖母マリアに祈ることもまた一つだ、聖母はきっと願いをききとげて下さるだろう」と説いた。そしてクーデターのニュースをいち早く聞きつけた人々のなかには、1年間祈り続けたマリア様がやっと恵みを下さった、と聖像を抱いて飛びだした人々もあったという。あるいはエンリレとラモスがたてこもった指令室には、エンリレが自分の守護聖人であるファティマのマリア像を持ち込んで置いていた。エンリレが民衆の前に出ていく時には、彼に従う兵士が頭上高くにマリア像をかかげ、あたかもエンリレとラモスの決起の背後にマリア様がいらして、決起を導いていくというふうな光

景を創り出した。それが、また、祈りの力と神の介在、あるいはマリア様のご加護と奇跡の実現というような物語の一つの伏線となるのです。

また、人々がヒューマン・バリケードで体験した時間というもの、表層的には陽気なフィエスタ（祝祭）気分でありました。それはどういうことかという、食物や飲物が無料で配られ、見知らぬ人達があたかも旧知の間柄であるように挨拶をし、マルコスを追い出せるかもしれないという解放の予感と喜びで満たされるという、そうしたフィエスタ的な状況が確かにあった。けれども戦車がやってきて戦車に対峙する時、あるいはヘリコプターが頭上を旋回して攻撃をかけてくるかもしれないという最も緊迫、緊張した時には人々は必死に祈った。必死に祈る数分だけの時間が過ぎた後に、ヘリコプターが攻撃を加えないでそのまま基地に帰順して、黄色の旗、あるいは白い布切れを持って兵士たちが降りてくる。戦車が何度も人々をけちらすようにエンジンの出力を最大限にあげて威嚇しても、最後にはエンジンをとめて、ヒューマン・バリケードを強引に突破しようとはしなかった。それは必死に祈ったことを神が聞いてくれたからだというような実感がそこに居合わせた人々のあいだに確かに存在したのです。ヒューマン・バリケードにおける緊張、緊迫した時間と弛緩した陽気さが混ざり合い繰り返される4日間の体験の最終的な総括として、祈りの力による緊張、緊迫した状況の回避ということを人々が想う。さらには、そうした人々の体験をふまえた上で、教会は〈二月革命〉の平和的な成功を神に感謝する百日間の祈りの集いを積極的に指示する。こうした祈りの力、神の恩寵、奇跡の実現としての〈二月革命〉物語というものが、かなり一般的に流布し、俗人にもわかりやすい説明として提示され、受け入れられていくわけです。

## 6 祭りのあとで

けれども、〈二月革命〉の後では、今申し上げたような説明が一般的に流布したのですが、それ以外の勢力も、各々の〈革命〉に対する貢献、正当性を主張して、それぞれの物語を提示するわけです。プログレッシブ・ブロック（進歩的勢力）と呼ばれるような、共産党系ではないけれどもリベラルな勢力、コース・オリエンテッド・グループ（cause oriented group）を作ってベニグノ＝アキノ暗殺以降にデモを繰り返してきた進歩勢力は、〈二月革命〉の直前の大統領選挙で示された民意がアキノにあったことは明白で、それは覚醒した市民の積極的な異議申し立てと政治参加の流れの当然の帰結であった、奇跡や神の恩寵などでは断じてないとするわけです。民主主義の選挙によって既に選出されていたアキノを大統領の椅子に座らせるために、民衆が直接的な示威行動をしたのが〈二月革命〉であったというわけです。〈二月革命〉によってデモクラティック・スペースと呼ばれる民主空間が実現され、したがってそうした勢力によって支えられ実現されたアキノ政権は民衆の望む社会改革、失業問題の解決、雇用の創出、農地解放などを積極的にやるべきだというふうな要求する。しかし、その後1年ほど経って、改革が遅々として進まない時に、だんだんアキノ離れとアキノ批判を強めていくわけです。

一方、国軍改革派は、軍というものは本来、外敵に対する祖国防衛ではなくて、内なる治安を乱すもの、とりわけ共産主義に対する防波堤として存在すると自己定義しています。マルコスの戒厳令体制下で、戒厳令発布時には数百人しかいなかったNPA（新人民軍）つまり共産党の実戦ゲリラ部隊がベニグノ＝アキノの暗殺時にはおよそ6,000人に増えて、その後1984年には15,000人くらいに増えた。86年には国軍は推計を出さないのですが、アメリカの

国防省統計では25,000人くらいに増えている。そうした共産党の勢力の増長は、マルコス政治の腐敗と抑圧的な体制が原因であるということで、共産主義の最大のパトロンとなっているマルコス体制自体をたてなおす必要があるとして、最初は軍の改革、より効果的、効率的な対共産ゲリラ戦争を行なうための軍の改革、規律の肅正をやるうとするのですけれども、マルコスとベールにつぶされる。そこでクーデターを立案、実行し、自分達が後押ししてアキノ政権を樹立させた。しかし、共産主義に対してより強い政権、より強い軍隊を作るために自分達が命を賭して決起したのに、アキノ大統領が政権をとることによって、むしろ軟弱で容共的な政権となってしまった。例えばアキノ大統領は政治犯、その多くは共産党の党員ですけれども、政治犯を釈放した。あるいは共産主義勢力と停戦協定を結んで、彼らの自由な宣伝活動に手を貸している。こんなはずではなかったということで、国軍改革派の人達はそれ以後クーデターを繰り返す計画し、そのたびに事前に発覚してつぶされる。最後には1987年の8月に指導者のホナサン大佐自身が指揮して実際にクーデターをおこして、ラモス側につぶされたわけです。

一方、共産党は大統領選挙をボイコットしてしまった。なぜボイコットをしたかという、マルコスはあらゆる不正な手段を使って居直りを図るだろう。したがって、大統領選挙はマルコスの居直りの口実として民意を得たというふうに使われる。もっとも有効な反マルコス派闘争は大統領選挙をボイコットすることなのだということで、ボイコット・キャンペーンをはったわけです。しかし、ボイコットしたために、それ以後の選挙から〈二月革命〉にいたる大衆運動の高揚に直接関与できないまま、〈二月革命〉が起こる。〈二月革命〉が起こった後に、共産党の内部で混乱が生じ、自己批判、すなわち流動する状況を正確に把握できず、覚醒した一般民衆の運動を指導できなかったという形での自己批判を行なう。その後アキノ政権側の懐柔政策を受け、停戦協定を結んだりするのですけれども、そうこうしているうちに、アキノ政権が国民の期待した社会改革をほとんど実践していないということで、最近ではアキノ体制をUS＝アキノ体制という認識で捉えて糾弾、打倒をいっています。そして実際に軍事攻勢をかけている。

教会としてはなんとしてもアキノ大統領でもって安定してもらいたいのですけれども、この先どうなるかはちょっとわからない。ただ進歩派がすでに離れてゆき、共産主義勢力の伸長に対処するためにも、あるいは軍内の改革派の動き、クーデターの動きに対処するためにも、やはり結局はラモスを中核とする軍の主流に全面的にたよらなければならないということで、アキノ政権の軍に対する依存が強まり、左右の両極分解が起こっていく。短期的には軍の力を全面に押し出して左派勢力の弾圧と封じ込めになんとか成功するかもしれませんが、進まない改革に対する失望と、悪化する強権、抑圧体制に対する反発により、長期的には左からの攻勢に対する脆弱性が増してくるというふうと考えられます。今後のフィリピン政治の安定にとって決定的な要因となるのは、経済発展と農地解放、要するに貧困問題の解決であると思いますが、貧しい者達のための富の公正、公正な分配は少数富裕層の強硬な反対を受けるので、多難な前途が予想されます。時間を5分程オーバーしてしまい、大急ぎではしゃってしまったために、おわかりになりにくいところがあったかも知れません。どうもありがとうございました。

## 参考文献

- 池端雪浦. 1987. 『フィリピン革命とカトリシズム』 勁草書房.
- 芝生瑞和. 1986. 『黄色い花の革命』 毎日新聞社.
- 清水 展. 1987. 「ピープル・パワーの精神世界」『社会科学論集』第27集 (九州大学教養部).
- Ileto, Reynaldo. 1979. *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- \_\_\_\_\_. 1985. "The Past in the Present Crisis." in May, R. J. & F. Nemenzo (eds.) *The Philippines after Marcos*. London & Sydney: Croom Helm.
- Maranba, Asuncion (ed.). 1984. *Ninoy Aquino: The Man the Legend*. Manila: Cacho Hermanos, Inc.
- Mercado, Monia (ed.). 1986. *People Power: The Philippine Revolution of 1986*. Manila: The James B. Reuter, S. J. Foundation.
- Olivares, Nenez Cacho. 1983. "The Last Time I Saw Ninoy." *Mr. & Mrs.* Sept. 13.

## 資 料

### [資料2] ベニグノ＝アキノ帰国前のインタビュー

彼女がニノイと久しぶりに、そして最後にニューヨークで会った時、アメリカでの快適な生活を捨て、刑務所か銃殺が待ち受けているフィリピンになぜ帰るのかと尋ねたところ、ニノイは次のように答える。「だからこそ、まさに私は祖国へ帰らなければならないのです。今こそ、人々と共に祖国にあって、彼らと共に苦しまなければならない。そして、もしあなたが覚えていてくれるなら、私が（心臓のバイパス手術のために）祖国を去る時、私は再び戻ってくることを約束した。私はその約束を守るのです。…ボストンのタクシー（強盗）に殺されるよりは、荣誉ある死を死にたい。我々は、何か焦点が、人々が結集するための中心が必要で、もし私が銃で射られて死ぬならば、私とその結集のための中心になることができるのです」[Olivares: 20-21]。既にこれらの言葉の中に、約束の成就、祖国への帰還、苦難の共有、荣誉ある死、という、アキノの殉教の物語を構成するメッセージが伏線としてこめられているのである。

### [資料3] ベニグノ＝アキノのキリスト体験（ロドリゴ上院議員宛私信）

その奇跡は、私が黙想していた時に起こりました。それは、キリストの降誕から昇天までの生涯でした。突然、イエズスは、生きている人間となりました。彼の生涯こそが私の靈感となるべきものでした。愛だけを説いて死を報いられた神＝人がおられた。全ての被造物に対する力を有しながら、謙虚さと忍耐とをもって茨の偽の冠を甘受した神＝人がおられた。そしてその高貴な意図により、恥づかしめを受け、非難され、中傷され、裏切られたのでした。

その時、私は自分の苦しみが、唯一の目的が人類を永遠の罪から救済することであった「彼」に比べて、いかにつまらないものであるかを、卒然として悟りました。…

このことに気づいてから、私はひざまづき、「彼」の許しを乞いました。私はたぶん別の使命のための準備として、単に試練を課せられていただけであったことを知りました。私は、この世で生ずる全てのことは、「彼」の知るところであり、了解のもとにあることを知りました。私が支えきれないような重荷を、「彼」が私に負わせないということを知

りました。だから私は、私の全てを「彼」の御旨にゆだねたのです。…

御心のなされんことを！ この言葉が、死の淵から私を救い上げてくれました。ラウルにおいて、私は自分の生命を放棄し、「彼」に捧げ、私の十字架を拾い、「彼」に従ったのでした。

「ひと粒の麦も地上に落ちて死ぬことがなければ、それはひと粒のままにとどまる。しかし、もし死なば、多くの実りをつけることになる。命を失なうものはそれを得、この世における命を断念する者は、永遠の生命を得るであろう。」[B. Aquino in Maranba: 228-229]

#### [資料4] 暗殺一周年ミサにおけるシン枢機卿の説教

本日、我々は亡くなったニノイのための一年間の服喪を終えることになっている。しかし、我々がそうすることに抵抗を覚えるのは驚くに当たりません。なぜならば、彼が命を捧げた理念—全ての地域に平和と統一、全ての人々に自由と正義—は、我々の切望と希求に鈍感なままの政府によって取り上げられ、手に入ることができなくされており、我々から離されたままにいるからです。…

行進は催涙剤と警棒によっていかに阻止されようとも、その目的地に達しなければなりません。集会は、約束の地を手に入れることがなければ、いかに感動的な演説があろうとも無意味です。…

我々が、ニノイの思い出に誠実であろうとするならば、「フィリピン人は死に値する」という彼の言葉に骨と肉質を与えようと思うのならば、我々は、意味と統一の探求のために我々自身をコミットさせてゆかなければならないのです。[Cardinal Sin in Maranba: 216-217]

#### [資料5] 選挙終了後のアキノ候補の声明（1986年2月5日）

我々の抑圧されている人々に力を取り戻すために、私は人間としてなし得るあらゆることを行ってきたが、今は神の力が介入すべき時に至りました。

神の助けなしには、我々がこの選挙を勝つことは不可能です。私は不正の経験がない。私は「サルベージ」（軍による反政府活動家の抹殺）の経験がない。私は人々を逮捕したり、テロルの経験がない。

マルコス体制を打倒するために、（選挙と開票作業の）不寝番を行ない、我々の生命さえも犠牲にするという誓いを立てた後には、我々はただ祈ることができるだけです。

我々は既に人々の圧倒的な支持を得ています。そして、祈りこそが我々が今、必要としていることの全てなのです。[Statement issued on Feb. 5, 1986]

#### [資料6] カトリック司教団の声明（1986年2月13日発表、16日ミサで読み上げ）

道徳的原理によれば、不正な手段によって権力を獲得、または維持する政府は道徳的基盤を有しない。そのような権力の入手は、暴力による強奪と同等であり、市民の忠誠を命ずることはできない。…

もしそうした政府が、人々に及ぼしている邪悪を自ら進んで是正しないのならば、そうすることが国民としての我々の重大な道徳的責務である。…

今は発言すべき時である。今は悪を修正すべき時である。悪は計画的に組織されている。それゆえ、その是正もそうであらねばならない。…我々の行為は、常にキリストの福音に従うものでなければならない。すなわち、平和的な、非暴力的な方法によらなければならない。

[資料7] ヒューマン・バリケードの情景

それはバリオ・フィエスタのような革命でした。人々が守護聖人をミサと歌で表敬し、友達が行き来し、見知らぬ人達が共通の大義のためにすぐに笑顔で顔見知りとなるような、そんなはなやかで、同時に祈りに満ちた情景が繰りひろげられたのです。そして食物も沢山ありました。シン枢機卿はそれを哄笑の革命と呼びました。人々は戦いに行くのではなく、巡礼にでかけるように見えました。聖母に対する信仰がかくも篤く、深いために、不寝番の夜が深更におよぶ頃、聖母像がエドサ通りのバリケードに沿って巡回するのが見うけられました。人々はロザリオの祈りを絶え間なく唱えるだけでなく、それを首に架け、あるいはそれが聖母御自身の御手であるかのように、その珠数をしっかり握っていました。マリア様の像はいたる所にありました。乗用車の上にもろうそくに囲まれて置かれ、クラーメ基地とアギナルド基地の壘壁の上にも置かれ…… それらを目にする時、人々は感情の高まりを覚えたのです。

…フィリピン人は、最も高貴な戦い、自由と民主主義と平和のための戦いに勝利しつつあった時、最も敬虔なキリスト教徒だったのです。[Pantaleon in Mercado: 250]

[資料8] 勝利を神に感謝する大集会におけるアキノ大統領の演説（1986年3月2日）

1986年2月25日という日、夜の9時という時間、自由の到来という出来事を決して忘れないようにしましょう。独裁の20年間からの自由一抑圧と、困難と、弾圧と、不正と、腐敗と、絶望の淵にあった20年間が終わりました。平和的な革命によって、祈りと、ロザリオと、ラジオと、そして何にもまして、人々の勇気によって終わりました。……

解放前の暗黒の日々のなかで、私は神が我々の側にあることを信じ、我々は何も恐れることはないと言ってきました。私は神が我々の側にいるばかりではなく、積極的に介在して、我々と共に戦ってくれたことを心の底から信じています。それ以外には、過ぎ去った日々の多くの出来事を、いかに説明することができるでしょうか。[C. Aquino in Mercado: 245]